

**利根川の未来を考えるカムバック・ウナギプロジェクト**  
**利根川水系にもう一度ウナギを呼び戻そう！！**

**ウナギに関するアンケート調査の結果(2015年～)**

利根川流域の回答者 57人

	利根川でウナギが少なくなった理由									
	ウナギの乱獲	シラスウナギの乱獲	利根川河口堰の建設	霞ヶ浦開発	利根川のダム建設	利根大堰の建設	利根川の護岸整備	農業用水路の三面コンクリート化	水田の乾田化	その他
人数	14	20	25	5	7	16	22	29	9	20
割合	25%	35%	44%	9%	12%	28%	39%	51%	16%	35%

回答者No.	利根川でウナギが少なくなった理由(そのほかの理由)
2	農薬
4	昭和30年頃から多分キャノン工場からの有害物質の垂れ流しによる河川の汚染(現在はないと思う)。水田の農薬の使用
5	ウナギの巣ができないのでは、親ウナギが上ってこれないのでは。
6	昔は川の砂地が多くシジミがいた。今は底はヘドロになっている。
9	水の浄化と草、林の育成
10	農薬の問題もあると思う。カエルもメダカもいなくなった。
18	外来種?
19	水温の上昇。里山の崩壊。
20	水田の減少。
25	谷中村跡の沼がなくなり、ウナギの住む場所がなくなったのではないのでしょうか。
28	一時の水質悪化。
32	上、中流に企業建設の為
34	農薬の使用、工業用水(排水)
38	経済優先社会で何でも金稼ぎのもとにしている。
39	農薬の多用。
42	すべてが人間を優先にして大切な自然を破壊したのが一番と思う。
45	水質の悪化、川筋の変化(単純化、コンクリート化)
46	農業用水路の三面コンクリート化で管理は楽になったが、生き物はいなくなった
47	農薬が使われるようになった時から、ホタルなどいなくなった。
49	農薬を使うようになって、魚はあっという間にいなくなりました。(農薬で、田んぼの用水堀にたくさんの魚が浮き上がっていたのは、私が子供の頃、昭和30年代前半だと思います)

回答者No.	利根川流域のウナギを増やす対策
1	農薬の使用制限(できれば禁止)。護岸整備の制限(自然を壊さない範囲にとどめる)。工場廃水を垂れ流さない。戦中戦後しばらくの間、アルコール工場の廃水を霞ヶ浦高浜町と小美玉市の境の川に流していたために、水草、アシ、マコモなどが枯れて悪臭がひどかった。水面水中にも植物はなく、ドロドロの濁り水になってしまった時があった。その後アルコール工場はなくなっただけで、軍の飛行場の燃料を作っていたと聞いている。
2	休耕田をうまく利用できるといい。
4	河川や湖水のクリーン化、自然な川辺を取り戻す。
5	ウナギの巣をできやすくする(水路のコンクリートをなくす)、川や湖の水の浄化、親ウナギの放流。
7	孵化する技術開発
9	コツコツと放流する
10	人間が水を使いすぎない、農薬を使わない。
15	漁獲制限
16	シラスウナギをとりすぎないこと。ウナギが川を逆上がれるようにすること。
17	乱獲を止める。治水も自然に沿った方法で。
19	生態系をバランスよく分布させる。このままだと、養殖稚魚を育て放流するしかない。
20	自然環境の保全。育生環境の整備。放流。
22	シラスウナギの乱獲の禁止。ウナギの乱獲の抑制。
23	自然と仲よくつきあい人工物をつくらないこと。田と小川を魚が自由に行き来できるように(昔のように)してほしい。
25	ウナギの成育の勉強をしてこなかった。子供の時から学ぶ必要があるだと思ふ。ウナギの棲みよい条件も作ってやることを考えてはどうでしょうか。
27	山の樹林管理、植樹、川岸、河岸のコンクリート化反対。中流域住民の排水管理。ウナギ棲息区域の立ち入り禁止(車をはいれないようにする)シラスウナギの捕獲制限、ウナギの捕獲制限。
28	河口堰の撤去。各所の水門の開放。
30	整備によって環境が変化するのでやたらにコンクリート化をしない
32	川の水がくさっているので、水の管理かと思う。
33	きれいにすることだと思います
34	小手先の努力はムリ。川のあり方etcきちんと考えるべき
35	シラスウナギを増やす
37	単に「うなぎを増やす」では魅力に乏しいと感じます。環境改善によって、関わる人のライフスタイルにどんなメリットが生じるのか？それを含めて提案できることが重要だと思います。
38	大きなダムを造るのではなく、田んぼというダムを活かし、コメの生産調整などするのではなく、おいしい米は輸出するべき。将来の食糧危機に備えるべきだ。
39	山の木の活用。農薬を減らす。
40	大規模な稲作を求め続け、農薬、除草剤を使用している限りウナギを増やすことは不可能でしょう。食物に対する国民的意識変革がなされぬ限り、むづかしい問題だと思います。
41	可動堰を深夜・早朝に開けて魚類が遡上できるようにすること。水門脇に魚の通り道をつくること。
42	まず常に川を整備して、水の絶えない流れを確保する。護岸整備やダムの設置は生、植物の命を奪ってしまう。多様性植物の共存をしっかりと考えることだ。
43	乱獲が最大原因ではないか。
45	非常に難しい。コンクリートを止め、自然な川の形状を取り戻すことかなとは思ふが。
48	ちゃんと川の上り下りが楽にできること。コンクリートばかりでなく、住める場所を確保する。捕りすぎない
51	人工化した水路を昔の河川管理に戻す。うなぎ河道をつくる。
52	三面張りから、隠れる石ころのある自然の川へ？
54	シラスウナギの保護
55	うなぎが海と川と湖を自由に行き来できるように、川の環境をうなぎが生息できるようにすること
56	どうやったら湖や流域にウナギを増やすことができますか？消費者と販売者の意識を改めた方が良い。一年中スーパーに流通させたり、土用の丑の日の過剰とも言える流通を止めるべき。護岸工事の無い川を維持、保全すべき。
57	河川の工事による環境破壊を止めること。養殖など人工的に育てられたうなぎでない自然のうなぎが生息する環境であって欲しいですね。

## 昔ウナギがいた場所・水辺の様子

●溜池や川にコンクリートは少なく、土堤や石積みが多かった。池や川にはアシが生え、アマモにエビ、タナゴ、タガメやミズスマシ、アメンボなど。田んぼには大きなタニシやイナゴ、バッタなど自然がいっぱいだった。田植えの時期から夏休み中は私が生まれ育った里山には3つの灌漑用の溜池と小さな池があり、水浴びをしながらドジョウ、ザリガニ、シジミ、タニシ、フナ、コイ、大きなカラス貝など取れ、もちろんうなぎも手首くらいあるようなのを捕まえたり釣ったりして思う存分遊んだ。

●鮎、おいかわ、ドジョウ、シジミ

●ドジョウ、フナ、ナマズ、カニ、ゲンゴロウなど。

●ザリガニ、ドジョウが豊かな、たくさんの浮草や水草の豊富な、綺麗な川の水であったのが強い印象。近くの子どもは、みんなその川で泳いだ。多分うなぎは田の水に行く砂の豊富な、農業用水路にいた。

●ナマズ、ハヤ、スナメンドジョウ、カジカ

●フナ、ナマズ、雷魚、ハヤ、カジカ。あみでとっていた。

●ナマズ、タニシ、ドジョウ、小魚、ヒル、カエル

●水が澄んだ小川。田んぼにそそぐ用水。夕方にミミズでウナギが釣れて困った、ハリを深く飲み込んでしまうので子供ではハリがぬけない。ザリガニ、ドジョウ、ナマズ、雑魚、沢山いた。

●玉村町(利根川、烏川、小河川、用水路) 数は少ないが、今もいる。モクズガニ、ヌカエビ等。

●川あしが生えておりホタルも多かった。川虫をとり鮎もつれた。父(90才)によれば昔鮎もとれたという。

●田んぼの中の水路。フナ、ドジョウ

●フナ、ナマズ、コイ。

●ナマズ、ドジョウ

●コイ、ワカサギ、エビ、ボラ、ウナギ、ライギョ、ナマズ、ウシガエル、カエル、ドジョウ、カニ、貝、タニシ。季節により変わる水鳥:カイツブリ、バン、カリ。代表的な水草:金魚藻、ヨシ、マコモ、ホテイアオイ、柳、ネコヤナギ、ハス、ガマノホ。

●鯉や鮎大きいのが釣れた。川辺は堰崩れを防ぐ坑木が何本もあった。

●当時霞ヶ浦は大変汚れていましたがウナギはいました。フナ釣りで釣れました。

●砂地の中州があり、川で水泳もできた。河川敷の小池には、ザリガニ、カエル、メダカ、タナゴが生息。

●水草、ヨシ、小ブナ、ドジョウ、金魚藻

●冬は用水が止まり、春田植え時期に用水に水が送られた。川エビ、ハヤ、ドジョウ、フナ、小魚各種。

●はや、ふな、どじょう、なまず、ざりがに、うぐい、こい

●ハヤ、ウグイ、など。砂利採取が始まっていた。

●ボラ、スズキ

●メダカ、クチボソ、タナゴ、ハヤ、サヨリ、フナ、朝鮮ブナ、コイ、ライギョ、ソウギョ、ヤツメウナギ、タウナギ、植物はヒシ、スイレン、藻類、その他カラスガイ、シジミ、他3~4種類

●小鮎、鯉、田螺、タナゴ、

●我孫子市江蔵地(利根川本流、河口に向かって右岸)岸から7メートル先水深5m。餌はミミズで釣った。(平成15年7月) 現在この辺に居るのは、鯉、鮎、フッコ、セイゴ、ワダカ、ハゼ、マルタ、ブルーギル、ブラックバス。嫌われ者のアメリカ大鯰。植物は葦、川端柳、ススキ、野ばら、他普通の雑草。

●フナ、ナマズ、ドジョウ、モロッコ、ヨシ。

●ドジョウ、タナゴ、メダカ、せんごろう。

●昔より、現在増えている外来魚が気になります。タイリクバラタナゴ(オカメ)、ブルーギル、大タナゴ、ア

メリカナマズ、ブラックバス。

- アシの群生、砂、泥など。ガマの穂、ショウブ、ススキ、アユ、セイゴ、ハゼ、テナガエビ、ヤゴ
- 40年程前はアシも生え、白鷺なども飛んできた川でしたが、護岸工事が続き鳥などあまり見なくなった。  
[注]中川の護岸工事でシャベルで石の入った袋を持ち上げるとウナギがいっぱい出てくる。釣りをする人もいたがそんなに釣れていない。
- 岸辺は土、植物が多い。小魚(フナ、コイ、ドジョウ、モロコ、口ぼそ、タニシ、メダカ等)。
- 田んぼの水路をせき止めて、かい掘り(けいぼり、とかよんでいた)。子供の遊びでもあったが、村の青年団で部落総出のイベント(年数回?)もあり、そこではウナギもたくさんとれた。それ以外の時にも、ウナギ、ナマズ・小魚(フナなど)、ドジョウ、タニシなどとして食べた。ウナギはヘビのようだし、ぬるぬる気持ち悪いし、おいしくもなかった。カニ(多分モクズガニ、清水の湧くところにはサワガニ)もたくさんいた。
- 玉村町の利根川、烏川、およびそこに注ぐ小河川、用水路には、数は少ないですが、いまでも見られます。モクズガニ・いまでも少しはみられるが、昔は田んぼにもいた。小さいエビ・ヌカエビかな・40年とか昔の話。20年ほど前に、玉村の川の生き物調査をしたときの記録:ウグイ・オイカワ等の、在来の魚の割合が多く、川の生き物相としては健全性が保たれていた。カムルチーなどの外来種も見られるが。わずかとはいえ見られたもの・モクズガニ、スジエビ、ギバチ、ヌマチチブ、ヨシノボリ、ウナギなど。
- 大きな農家に嫁ぎましたが、その家のまわりには堀が巡らされていました。その堀は今でもあり、水がたまっています。(ちなみに、私は他にも1軒、堀のあった家を知っています。堀は昭和30年代まではあったと思います)。堀にはナマズや小魚がいて、ウナギもいました。
- ウナギは田んぼの堀にいた。
- ドジョウは小学生の時花見川で見た。中学生の頃はほとんど見なかった。
- 川幅2~3m、川の護岸は石垣でできていて、石垣の間にうなぎが生息していた。川には水草や藻などが群生して、魚の住みかになっていた。他生物:ナマズ、ハヤ、フナ、ドジョウなど
- ナマズ、コイ、フナ、クチボソ、タナゴ、エビ、ザリガニ、カエルなど 梅花藻、アシ
- なまずや雑魚等たくさんいました, 祖父が夏になると毎日10匹くらい採っていました。

### ウナギの思い出

- 大雨の時、川からのぼってどんな山奥の沼や池にも入ると年寄りが話してくれた。同じように大水の時、今度は下っていくのだと聞いた。
- 一番の思い出:こども(中学生)の頃ウナギを初めて釣ったときです。
- 捕れるたび母がさいて焼いて食べた。ライギョも沢山いて天ぷらがおいしい。夕方釣れることが多いので子供ではハリがはずせず、そのまま家に帰らざるをえなかったことが残念だった。
- 沼が大洪水の時に捕って食べた。藤沼の土地改良工事の排水工事で排水路を壊す時、一か所にウナギ30匹余り集まっていたのを捕まえた。
- もう30年も昔、利根川で鮒を釣っていてウナギが釣れたことでしょうか。
- 母の日に母にうなぎをおごったこと。
- 採ったうなぎは盥で幾日か飼って、その後、父や兄が捌いて焼いて家族で腹いっぱい食べた。小学校に入学前の夏、10才上の次兄に夜連れ出され、田んぼの、田へ入れる水を温めるための堀でドジョウやウナギをう罅で捕まえた。その時の灯り持ちが私の役目だった。とても眠くて区路から足を踏み外し、水の中へドボン。とても辛かった。

- 夏の早朝、誰かが仕掛けたうなぎ釣りの「置きぎを」を引き上げ、うなぎがかかっているか否かをチェックすること。
- 15年も20年も前スーパーでたくさんのうなぎがバケツの中で売られていて、「豊かだな」と感じた。
- 学校帰り、街のうなぎ屋で生きたウナギを千枚通しで頭のところをまな板に止め、さいて骨を取り蒲焼などの下ごしらえをする情景を立ち止って見ていた。キモと称するものは別の容器に投げ入れていた。
- 小学生の時の夏休み、友達と取りに行ったが私は1匹しか取れなかった。親が焼いてくれた。
- 井戸端で祖父が目をキリでさし、腹をきれいにさいた。祖父のみが食し子供にはまわってこなかった。
- 美味しそうなウナギが小川を泳いでた！
- ほとんど常食(とれればいつでも)、煮て食べた。蒲焼きなどは作らなかった。ツクシという竹ざおにタコ糸をつけ、針の先にドジョウをつけて、夕方岸辺に立てておくと翌朝ウナギがかかっている。糸が竹ざおにからまって暴れている。
- 夏、用水に水が送られる時、気が向くと兄弟姉妹でとって、捕れた時食べた。代用水からさらに田に引く堰を止めて掻い掘りした時は、川にどう(竹筒)を仕掛けて、二人で蓋をして捕った。
- 子供の頃、利根川で置き針、又はビンダルという漁法でウナギを取って楽しんだ。
- 5年前には1キロ 2000 円前後でしたが、今は 5000~6000 円で大変。
- 小学生の頃、利根川が増水して水が引いたため池にウナギがいて、それを川魚屋に売って、その金でせんべいを買って食べた。
- 昭和30年代の幼少時代の川遊び(小川)でウナギを捕まえたこと。
- 利根川で魚釣りをしていたら、思いがけなくうなぎがかかっていた。
- とにかく食べるのに精一杯で、料理といえるほどのものではなかったでしょう。砂糖もろくにない時代ですし、醤油で煮たか焼いたかでしょう。
- 捕ったウナギは食べないで、みんな売った。普通の人が高価なため、食べられなかった。産前・産後など特別の時。土用に食べたかもしれない。川魚料理店へ売った。館林方面はナマズ料理など、川魚料理が名産となっているので、そちら方面の店で需要があった。20年前(?)頃には、4月~10月まで、毎日のようにとれた。だんだんとれなくなってきて、数年前では一週間に1~2匹といった程度。
- 特になし。(食べる習慣もなかった。近所の川でとれるのを知って、びっくりしたくらい)。
- 時折(時期は決まっていた?)近所の人と堀さらいをし、その時つかまえたウナギは新町(高崎線新町駅のある所)の料理屋に持って行って売り、帰りに酒を買い(ウナギを売ったお金を使っていると思う)、みんなでいっぱいやっていました。他の魚は火であぶってから煮付けて食べました。
- 1950 年頃、小学生の時、置き針で獲った(日暮れに仕掛け、未明に上げる、餌はミミズ)。
- 現在船橋港でポツポツ見ます。沖でもたまに獲れます。
- 夕方仕掛けて、朝とりに行って、かかっていると大変嬉しかった。
- 手賀沼でうなぎをオケで獲ったこと。もう20年以上前のことですが、こんな汚い沼にうなぎが生存しているのか！とビックリしました。
- 中学時代(昭和30年代)に子供3~5人で近くの八瀬川(県一級河川)を2か所せき止め、水をかき出して魚獲りをした。前日に仕掛けたうなぎ捕獲器でうなぎがとれた。
- 水路のテトラポットの隙間を泳いでいるのを見た時の驚き。利根川の水海道あたり。
- 朝になると祖父がうなぎの入った胴からうなぎを出すのを見るのが楽しみでした。

## 参考 利根川流域以外の回答者20人

### 利根川でウナギが少なくなった理由の回答数

ウナギの乱獲 7 シラスウナギの乱獲 9 利根川河口堰の建設 11 霞ヶ浦開発 7 利根川のダム建設 8 利根大堰の建設 8 利根川の護岸整備 9 農業用水路の三面コンクリート化 12 水田の乾田化 7 その他(中性洗剤、有害排水の垂れ流し/水質の悪化/ウナギを安価で食べられるのは当然の権利だ!という傲慢な消費者の意識/ダム開発して海岸侵食、海岸の埋め立て/餌となる小魚が繁殖できない環境になった/海洋環境の変化/ダムとか、早強剤としてポルトランド生コンクリートを使っています。このポゾリス、早強剤が何か生殖に反応するかもしれません)

### 利根川流域のウナギを増やす対策

●まず河川の護岸工事を天然の石垣に変える。堰を一部撤去(稚魚が上流に昇りやすくする)。河床に土を入れる。山からの有機物が流れてくるようにする。

ウナギは昼は巣穴に住み、夜に餌を求めて動き回る。したがって、巣穴を多く作ること。餌(小魚、カニ、ミミズ等の小動物)が住む河床とする。もちろん上下に移動河床とすること。

●河川の汚れを改善する。流域をできる限りコンクリート等で固めない。

●農薬を減らす。

●ダムや堰を撤去し、護岸のコンクリートを剥がし、中性洗剤を禁止せよ。

●ウナギに適した環境を復元する。

●農薬・化学肥料を使わないきれいな川にする。護岸工事でコンクリートで固めない。

●餌、住処を含めた総合的な生息環境の回復。

●海と河川の往来を保証する(障害物の撤去)。淡水域での生息場所を用意する。消費者が「ウナギは高価で当然」と意識を変えること。

●生きた河川に戻すこと(森と一体として)。ノボリコ(シラスウナギ)が戻れる汽水域の再生(東京湾は貧酸素の底層が広がっている。サンドポンプの埋め立てのツケ)。

●とりあえずシラスウナギの乱獲止めればぐっとマシになるかと。住処を作ったところで肝心のウナギが住処にたどり着けなきゃ意味がありません。

●本流よりも支流の大小の川の横断工作物の撤去なり、スリット化することで、河床の礫床を回復させ、かつ、河床の安定をはかり、ウナギの餌となる多くの魚たちが繁殖できるようにすることが必要。餌がなければ、ウナギは生きていけません。

四万十川にはいまでもウナギがたくさんいるわけですから、ウナギを復活させたいのなら、四万十川の環境調査を行い、利根川が同様の環境になるように復元・復活をはかることがもっとも近道だと思います。安易な放流では見せかけなので、ウナギの資源回復にはつながりません。しっかりと現場を見据えた取り組みが必要です。

●流域の河川からダムや堰などコンクリート構造物をできるだけ撤去し、もともとの状態に自然な流れに近づけること。農薬や合成洗剤など化学物質の散布や使用等を止めること。

●護岸などの工作物、堰、コンクリートをはがして、ウナギにやさしい自然の姿に戻す。今の科学技術と地域の皆さんの協力があれば、実現できます。ウナギを食べるテレビ番組を作るなら、ウナギのための環境作りの番組も放映してください。企業、個人、自治体がウナギのための基金を作り、全国のウナギ再生の活動を支援してください。

## ウナギについてのコメント(抜粋)

- 思い出: 2mほどのウナギが仕掛けの針と糸にからまってとれた時。
- フナ釣りをしていると(ミミズ餌)、小指の太さのウナギの子どもが釣れたので、串に刺して炉端で焼いて食べた。夕方、竹棒に小さいドジョウをつけ、10 本位小川に刺して翌朝引き上げると、大きいのが5、6匹とれ、夏バテ解消・スタミナ源として家族で食べた。  
千葉県南白亀川(なばきがわ)では現在もパイプや竹筒を仕掛けて獲ったり、ウナギの夜釣りをしている人もいます。
- 自分で獲ったのは蒲焼にしたり、他の雑魚と一緒に煮て食べた。病気の人には優先的に、病人がいない時には家族で分けて食べた。品薄で日常的に安全な国産ウナギが食べられなくなったのは寂しい。外国産は心配が多い(汚染)。
- 農業用水路に置き針を前夜かけて、翌朝引き上げる。ウナギの稚魚(メソッコ)がいた。ナマズ、大きいウナギがとれた。
- ウナギをとるな。関東、日本海側を含む東北のウナギは放射能で汚染していて危ない。特に利根川、江戸川。注意喚起をもっと活発に！
- 子どもの頃、夕方、川に釣り針にミミズをつけてひたしておく、川の流れて餌が浮いて、それにウナギやナマズなどがかかる。朝早くそれを引き上げる。毎朝2、3匹は獲れました。
- 竹の先にドジョウを仕掛けたものを、岸の岩間から入れてウナギをおびき出して釣る(昼間)。
- 今はストロンチウム、トリチウムの放射能汚染。このベータ線は骨に集まって発がん性が高い。このアンケートにその視点がないのは残念！
- 絶滅危惧されてるのにコンビニや牛丼屋でホイホイ売ってるのがおかしい。世界中から無茶して買い漁って「企業努力の賜物だ！」と威張る商社もおかしい。そんな安いウナギを毎年大特集して食べ食べと煽るメディアはクズ。フグばりに免許制にでもして規制し、流通経路も徹底的にクリーンにしろ、と思う。
- 竹を割って細く削った 60cm 程の竿の先に、たこ糸を付け、たこ糸の先に”カシ鉤”を付け、生きたドジョウを付けて、夕方、小川の石垣に数本仕掛け、翌朝、回収に行き捕獲した。また、夜に懐中電灯で川面を照らし、三日月形の大きな網ですくい取った。水田が終わる秋にため池の水を抜いた時に、大勢で魚採りをし、ナマズやウナギを捕まえた。
- 昔は稚魚が気持ち悪い位いました。
- ミミズを採ってウナギてご(細長い筒状のかご)に入れて小川に石を乗せて沈めておき、翌朝引き上げるときにウナギが入っているときの嬉しさ。
- わたしの叔父さん、75才前の人たちは、石をどければ、ウナギがいたそうです。

注: 本集計はアンケート項目のうち、特にウナギ復活のための活動にとって重要と思われる点を中心にまとめたものです。

集計: 2017年7月31日

問合せ・連絡先: 利根川流域市民委員会 深澤洋子(事務局)

187-0001 東京都小平市大沼町 7-5-4 T/F 042-341-7524 bbjaga@jcom.home.ne.jp

利根川流域市民委員会ブログ <http://tonegawashimin.cocolog-nifty.com/>